

梅の造花、大津町

大津町は熊本市の東側、西に連なる阿蘇山の麓に位置します。

天正16年(1588年)、加藤清正が肥後の領主となると

大津町の治水事業に着手、一大穀倉地帯となりました。

江戸時代に作られた上井手・下井手は、今も大津町の田畑を潤す大事な水路です。

また、当時は肥後と豊後を結ぶ豊後街道の要衝、参勤交代の宿場町として栄えました。

現在も、空港や駅が近く、交通の要として国内外の観光客やビジネスマンが

行き交う町です。変化する町の、変わらぬ伝統を味わいにお越しく下さい。



※このほか、町内小中学校などに設置しています。 ※江藤家住宅は年に2回の一般公開時にご覧いただけます。

[お問い合わせ]

大津町歴史文化伝承館

〒869-1233 熊本県菊池郡大津町大津1109

TEL 096-293-4100(9:00~17:00/月曜・年末年始休館)

〔企画・発行〕大津町地域おこし協力隊
肥後大津民芸造花保存会
大津町
大津町教育委員会

[デザイン] 川野深雪(株式会社APiCA)

〔イラスト〕 中村里美

梅の花造

大津町指定 無形民俗文化財

2024.12月発行

生花と見紛うばかりの美しさ 気品ある梅の花

大津町の無形民俗文化財に指定されている「梅の造花」は、梅の生木の枝に「^{つうそうし}蓮草紙」という紙で造られた花やつぼみをつけた、精巧な“造り花”です。花が開く様子やつぼみの様子が、まるで生きた梅の花のように表現されています。花・つぼみ・うてな[※]等の精巧な技術はもとより、何よりも大切な特徴は、その枝振りや株、新枝の萌え出る花の配合などとされています。

※うてな／花のガク。花の最も外側の部分。

【思いの儘(まま)】一輪の花の中で異なる色に咲く品種。梅の造花には、この品種の作品も多数あります。



梅の造花の歴史

梅の造花の祖と伝えられるのは、江戸時代に大津町の役人であった岡田家の岡田兵左衛門。その屋敷内に祀った地藏尊の縁日に、造花を並べて披露したことが、現在の「大津地藏祭」の形につながっています。岡田家は、代々造花の秘伝を受け継ぎ、その文化は町に広がっていきました。



当時、参勤交代の宿場町であった大津町。梅の造花は殿様の目にとり、江戸への土産として大変よろこばれ、「山鹿の灯籠か大津の梅花か」と評判になったと伝えられます。昭和47年(1972年)からは「肥後大津民芸造花保存会」がこの伝統を守っています。



※大津町の『寿賀廻舎日記抄(すがのやにっきしょう)』や『大津町史』に詳しい歴史が掲載されています。



1 梅の花の各パーツ／2 花びら、花芯をうてな[※]に1つ1つ組み合わせ、一輪の花が完成／3 思いの儘の花一輪／4 台湾の蓮草紙職人(写真左側)との交流の様子／5 小鳥や若草をあしらった、遊び心ある作品。

台湾とのご縁

「^{つうそうし}蓮草紙」は、^{つうだつぱく}カミヤツデ(別名:通脱木)からつくられ、水中花などにも使われています。梅の花びらの丸みを豊かに表現できコシが強く、年数が経っても紙の形が変化しません。梅の造花で重要な役割を果たす蓮草紙は、明治の末、造花の職人が台湾を訪れた際に見つけました。それまでは、和紙や羽二重^{はふたえ}という紙を使っていましたが、蓮草紙を用いることでだれでも容易に造花をつくるできるようになりました。

一時期、紙の入手が難しくなり、梅の

造花が途絶えた時期がありました。この素晴らしい文化を途絶えさせてはならないと、声を上げた有志たちの長い年月の努力により、再び台湾から蓮草紙を入手し、復活させました。その後も梅の造花には蓮草紙が使われ、台湾との交流も続いています。

現在、大津町は大きく変わろうとしています。台湾からの移住者や観光客も増え、今後ますます台湾と大津町の交流は活発になることでしょう。

蓮草紙とカミヤツデ

